江戸職人哥合

へ4
796.
2

左 樵夫

太乙食

厚新の一段かるうさとことはざのなくあるる浪人
竹ずのかるきまくすあまぐ谷ちこやもいのふるる厚新
太太ちも世中の判元左汁たざるるまぐるる
と侍あ事詞優ずや侍人右ハ世の業
ふ古こを事れく一その袋ろ一ぶく谷ち
こ厚もいのふなぐをうう侍の郎む揚べし
晩ちるれちぐ命しくもぬちち敷をわがるまむ
生まふのいの人ぐ人見まぐぐろやむ初のこちぐる中世まり形さ
太古事青刺元ぬの大敷ハもけぐくとうこ紀
法いるまのるぬる怪あるべしたの揚

十二番
左 奢者

右 仲輝

役引ふうつ訴ふ角のいつれ地乃神をのりくもきる文事
姫寺旦毛纏の事よりあるこをえてひのこまでまふ月ぞちをふ
たゝヤ云いつれ地とふなそふるるか侍る森左陣云
角ハ角清おざくいまの通左ヤ云たゝ云ふいさかひ
いつまて感ふ判云左云いつまて地の事表裏ハ敬ぞ
普通ふ寨叢なまふ先まどあれ地ふまん
乃とんとふへましるも掛まええれぶきやうの更
をおくをくくいまれまをそれ地感まる敬まび
あれ地もふあまを他者の役引ふる過ぎれぞ
なはず又役引ぞ侍る先う清寺ふ義地と侍るい

不うふまふ地見ふ事とふ先まのそまるまぬれ
ぶまくや屋じて角つおざくふまん雑おくやたれ
云左方義ナやくふかひのこまでまるはのちをふ
ハ母しうやハ侍るぬ一首ちさまふさはを那き
まそふの神ぐ火敬乃ふさかひこみのまうぐ
なぞくへまある地
人妻ふのくふんをふひうねてもまるは地打あぐ先津く
火事とそて打つまやもも下をえの絢ち煙の事ふ左ちあば
たゝヤ云つくをえまる和ありと形るいぐ左ヤ云打つ事
屋をんとふ火見の大敷を打るか河まくぐやや判云

はしどめの事、させるる細かりしもおぼえ侍ぬ。
大抵つくいでとゝ[illegible]ふよりおもむくして、結ぶ間の後、
おもむき先津にハ、おなじめくに物おとをする事
よくいふことのこしまりなどづゝ祖とあるつ
ゐぢ、おらまさ名いさ西れと早意ハ[illegible]山一途に、
初心のかゞよくいかゐへぶまとゝふ事ゝさこ西
ゝやちどうりの物まるまびハ伊と紫伊てよそ[illegible]ても、後
叶ゆゝとゝるべしにるまふれを禁ぜも、間
ゝゝ山道ゝえぬ毬上の白ゝうけしと平ゝハ。
ゝるのゝもとの事ど高徹の間ゝ返引ゝ。

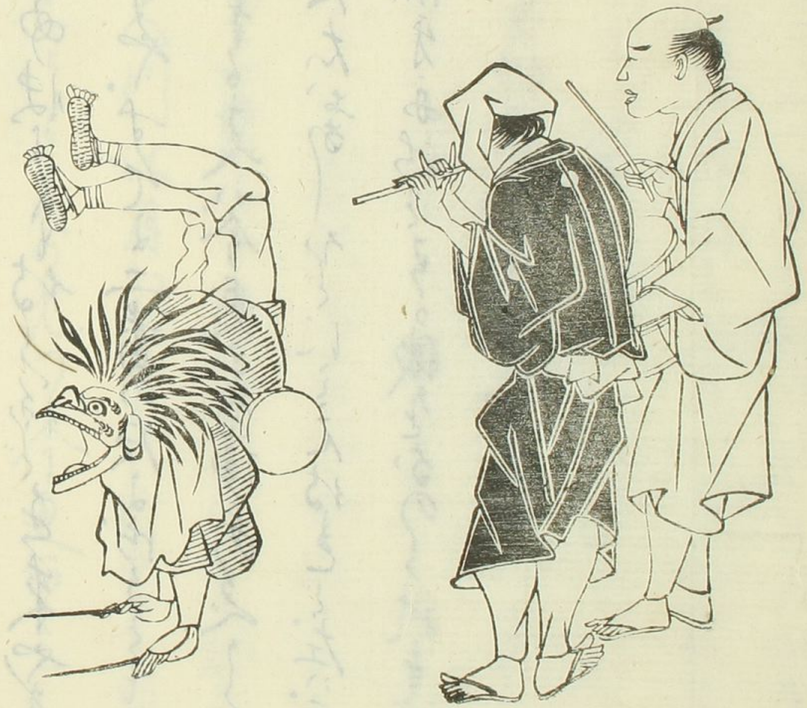
堂築ゝ様ゝどゝふ雅ゝるのゝ那ゝ。
なゝめてゝくてもゝ待ん。方ゝたゝるゝと間
ゝゝゝ郭ゝ物ゝ間ゝ衣ゝゝくてゝ
しゝの家ゝゝふ例ゝいひなゝゝ歌ゝ乃
略ゝ世上ゝて出ゝゝ帰ゝ那ゝ西ゝ
ゝるべくゝゝ乃ゝ書ゝ物ゝなゝ津ゝゝゝ
物ゝめゝるハ婆ゝゝゝ姉ゝ事れどゝの下ゝ
物煙ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
立ゝゝれてゝ待ゝゝゝゝゝゝ。

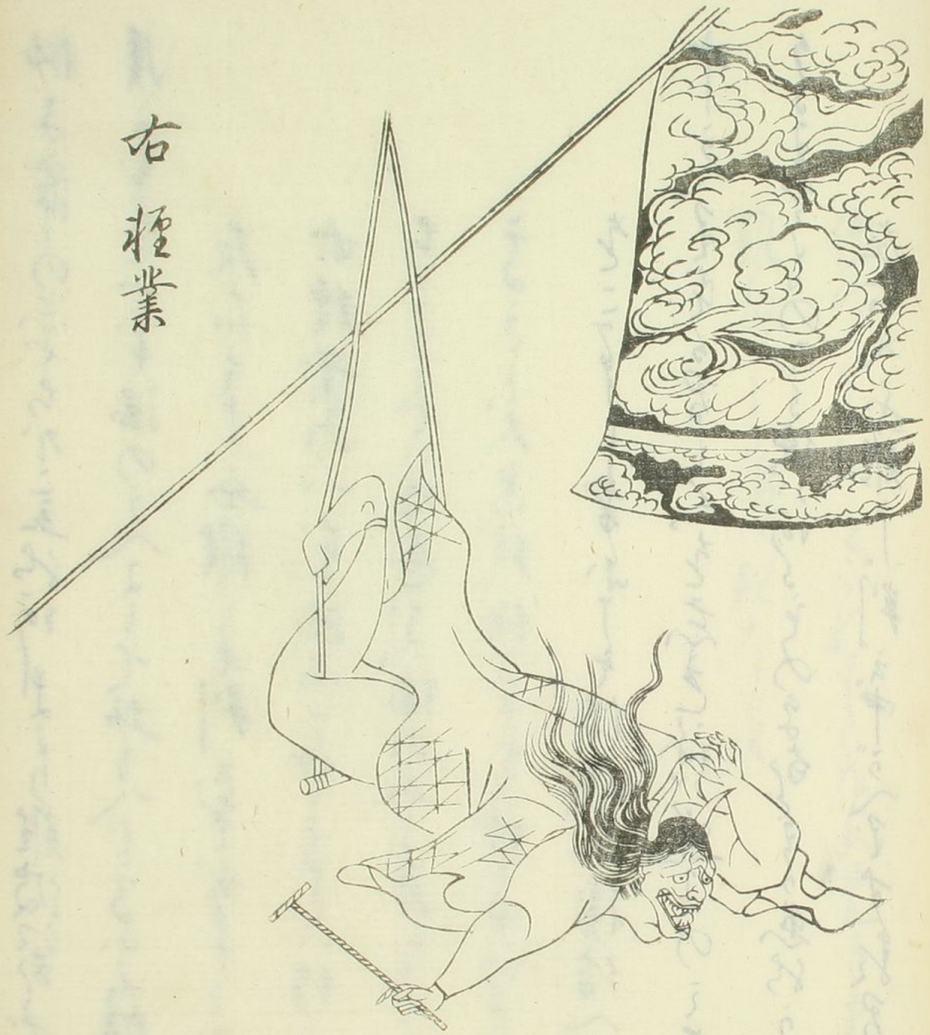
十三番

左 指物師こさく

右 四ッ手ばるまき

牡牙歯の一紫うんぬん
初て乃月まるるとなる主は行智の歌まれの声
右方は一紫うべくのあるとも侍へし。牡牙
歯の詮なくや。左方は音貞判に一紫うべてと
牡牙歯は詮なくとも方の人はいかのあ
ゆ歯くしも屋形歯根みあるとりそおも
猪牙歯で一紫とは侍べきだとも郭なさ
なれど。大川は月初るとは歯て侍ぬ後
牡牙歯はこゆまるとたの色つ今更何ようこ琴ぞ
なりよ事ゑやそゆべの写ゆ駕うくとも
左右を雅は判に左の頭えやゆべのなな
まるひ歯はくも侍ぐ毛東やまくやる
こるるや。すでは二番の左はうくもこえぬを
ゆるまるうへ八今更吳論あべうに方は
ちまい左右おなどにこえ侍もど左は二首もみ
初月は牡牙歯はくもの職をおのく抜する頗七
巧人なるこ俳ままけ侍べ。


下四番
左兵衛
獅子


右 狂業

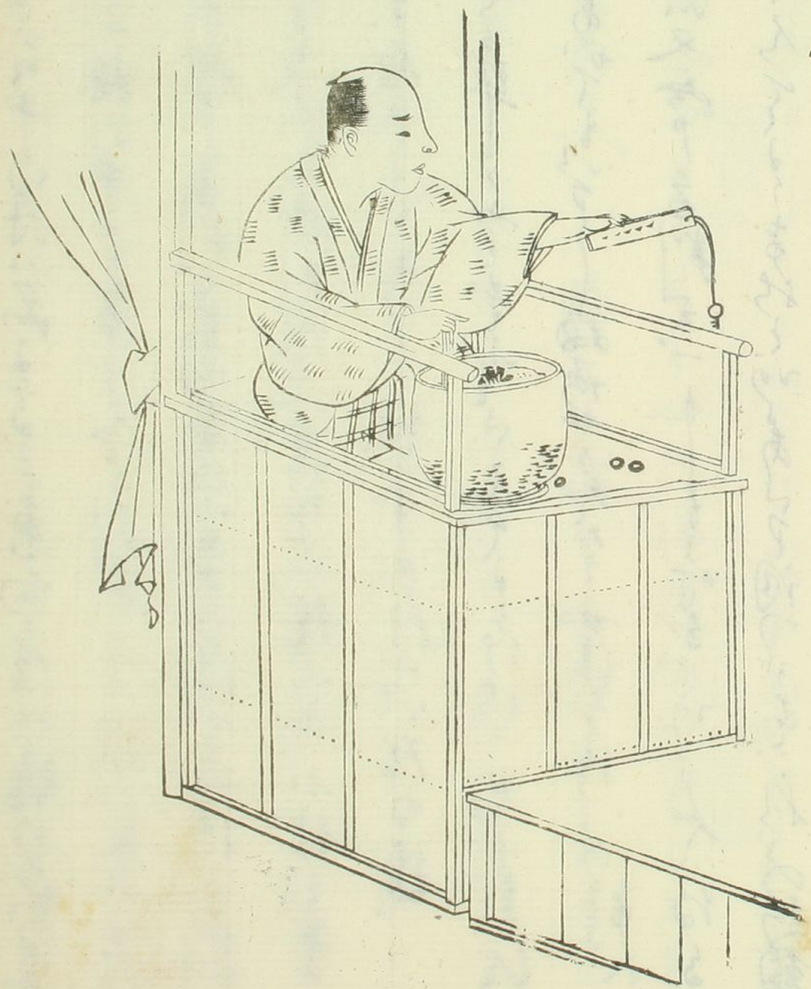
柳子新の志やちかこゝ立ちのまより雑波窓でゝ新
月のぎを一本掘のうへよりて地もへゞるゝ牧乃夜ゝ
左右ゝ中に雑こゝ也判云ゝ言まことに学雑歌
右稽業の一本掘ゝ中ゝ作ゝ言ゝ作ゝめゝ天
ちゝるゝやゝ作ゝ色ゝ縁の上ゝ月をこゝ出ゝへゝ
るゝゝ大ゝ歌作ゝ初ゝ中ゝのゝれゝゝきゝ
をこゝゝ中ゝ作ゝ作ゝ左傷作べ
中ゝへゝるゝ人を忘ゝ逆ゝ面新ゝ
るゝゝものゝ使ゝゝるゝゝ悪ゝゝゝ
左右又ゝ雑中ゝ判云中ゝへゝ逆ゝ

俳のゝゝむゝとゝゝれゝゝを先ゝ判ゝ
雑ゝ撰べ歌なゝ

十五番

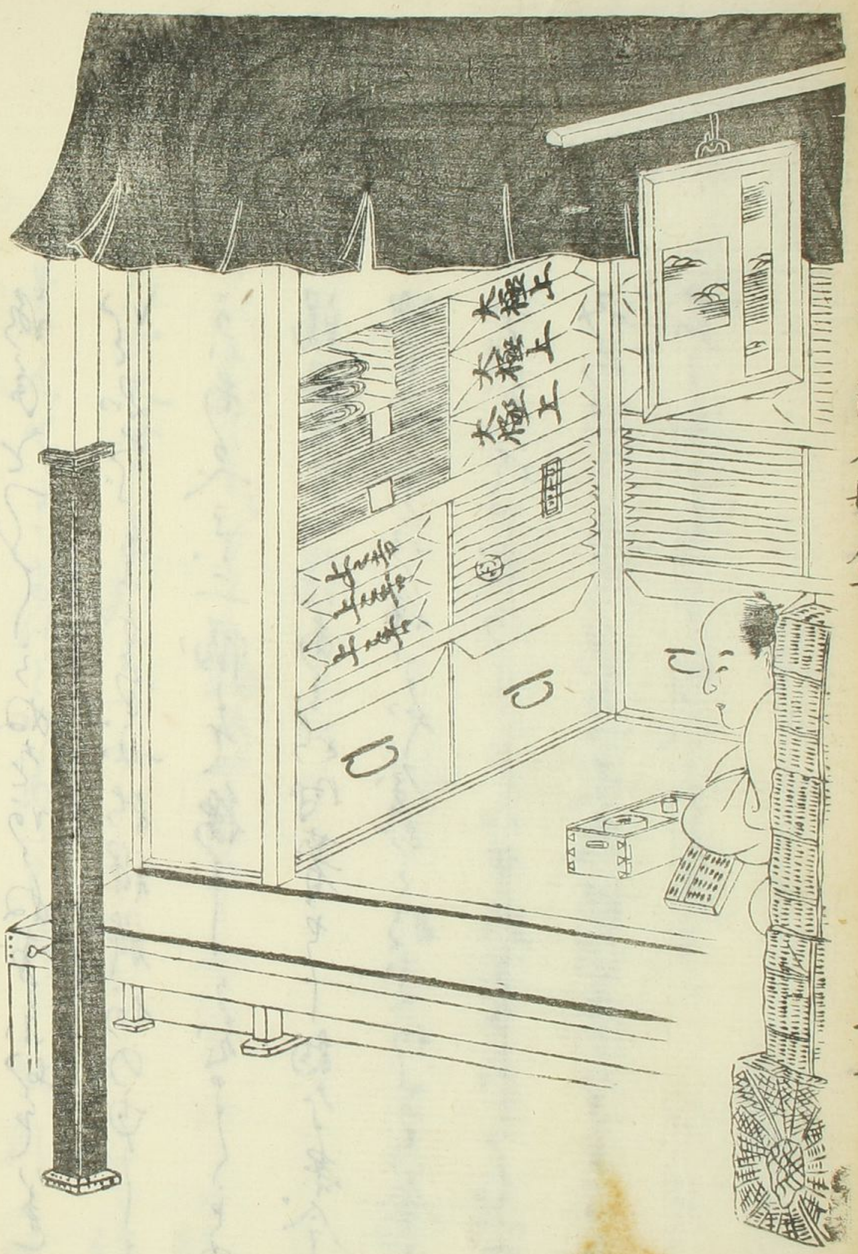
そそうや

六 湯屋



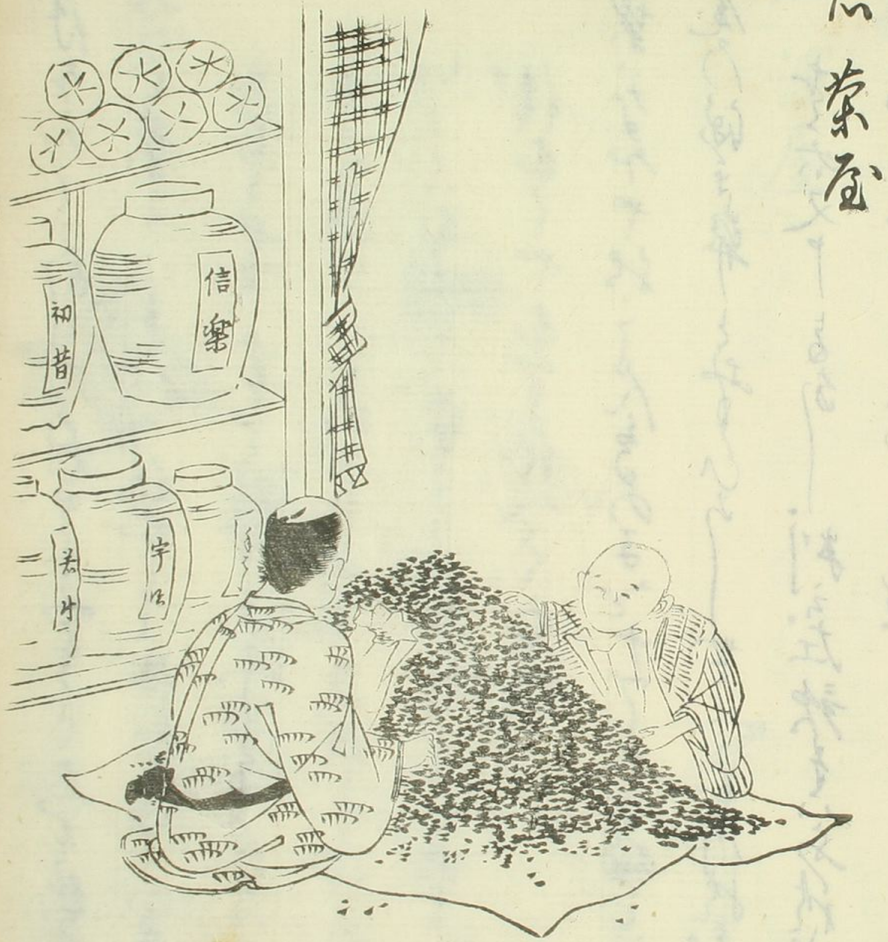
そぞちへもこれ中の月は名よるさ東向屋が樽の数の空
うす湯ぞ小桶の中よりぞ引宮とる桜乃家の月

左右 諸白 判 東向菴の家中の屋 すぐれたる
味なるべし 右引宮が月を小桶の中ふ待と雪
ても 屋さくもすくなくならぶめれば たゞ勝
ひもうハのかてる幹ゝ ゝ ゝ ふ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ



十六番　左孝屋

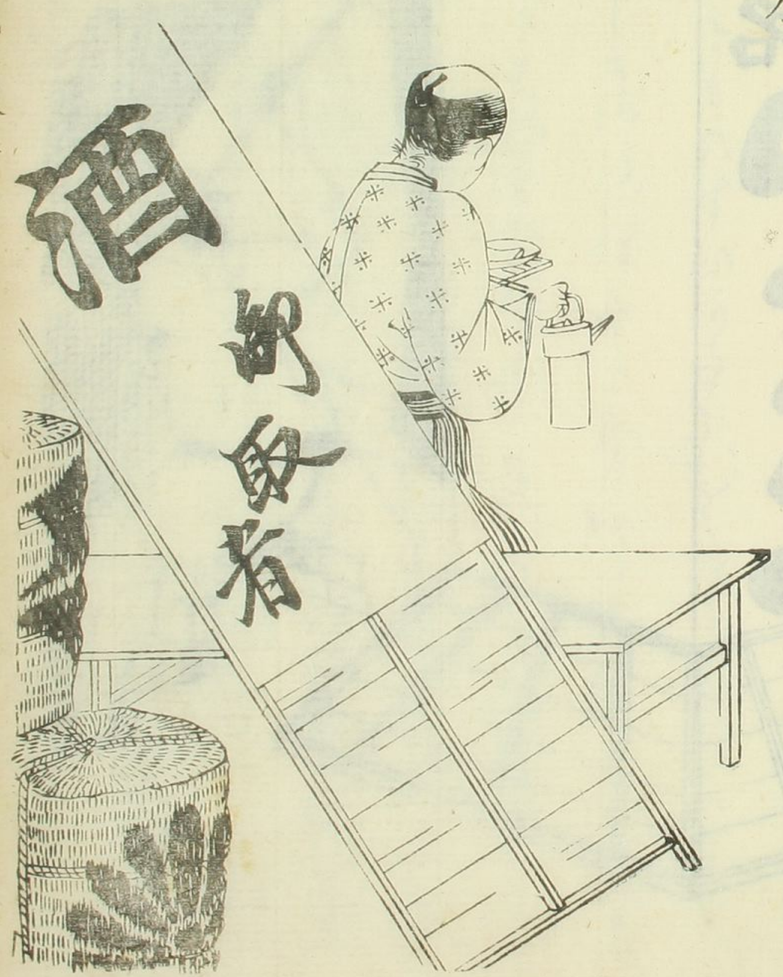
左孝屋



てる月をかぐつちの村雨ときさのつを秋の秋風
秋とゝへど紅葉ゝうきれる仙地て藤の枝のまゝふ月をる賢人
友だち音信貢をゝ歌すさうゝ多人月うぎとかる
斗ゝ歌なくも仕ゝ月、ゝ月、残てゝのゝれなおもし
いるゝゝおもて紅葉ようのをゝ秋ゝ仙地をんる月頃
情おくゝやおぐゝ社へくる物
ゝの紅葉なかやゝゝこんるのゝとナでナゝ姫ゝゝのくゝも
ゝ乃尾乃ゝ浦ゝ軒ゝゝひゝゝ世をゝゝ川ゝゝゝぐゝゝぞ
きゝ衣又ゝゝ月ゝ判ゝ左詠をゝ社ゝぐゝゝ
ゝゝゝ月ゝ左詠をゝ社ゝぐゝゝ

十七番

左　酒屋



白餅屋

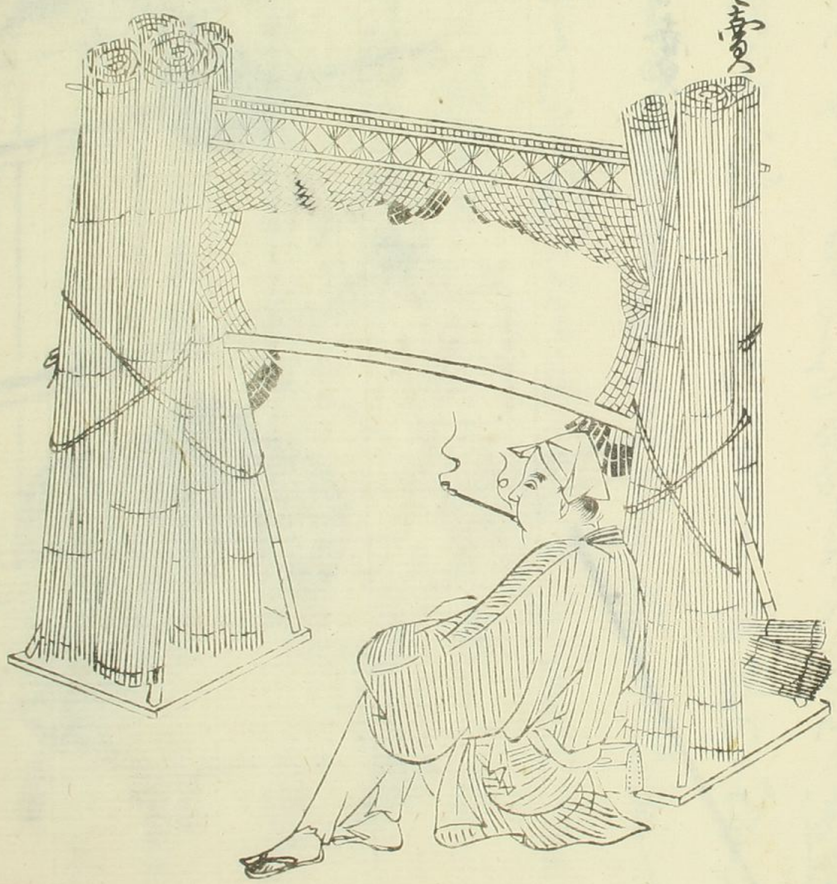
都人こよひらるみ立おそうも結す山の角やうるる世
南國の河辺乃屋ようれあくいく稜のちゆめ祢屋の杭で
右ゆるのす山何のるふかを陸ら酒結名あり。
右又中ごろば伊毋よ桂この先郎人とふ。
判ゑ結ゑ山ハ伊毋なれ加義ゆ
なてよれるとゑ和結ど武義結ゑ祢
ゆらるのと大和のみよ桂よひ前陸奥乃
白川を宮ゆ和と山城の白川よゆ
ゆくひ宮ゆ結ゑ祢ゆ
の杭でいしゆゑ結ゑ祢ゆ結ゑ稜ゑ祢ゆ

身体へし。

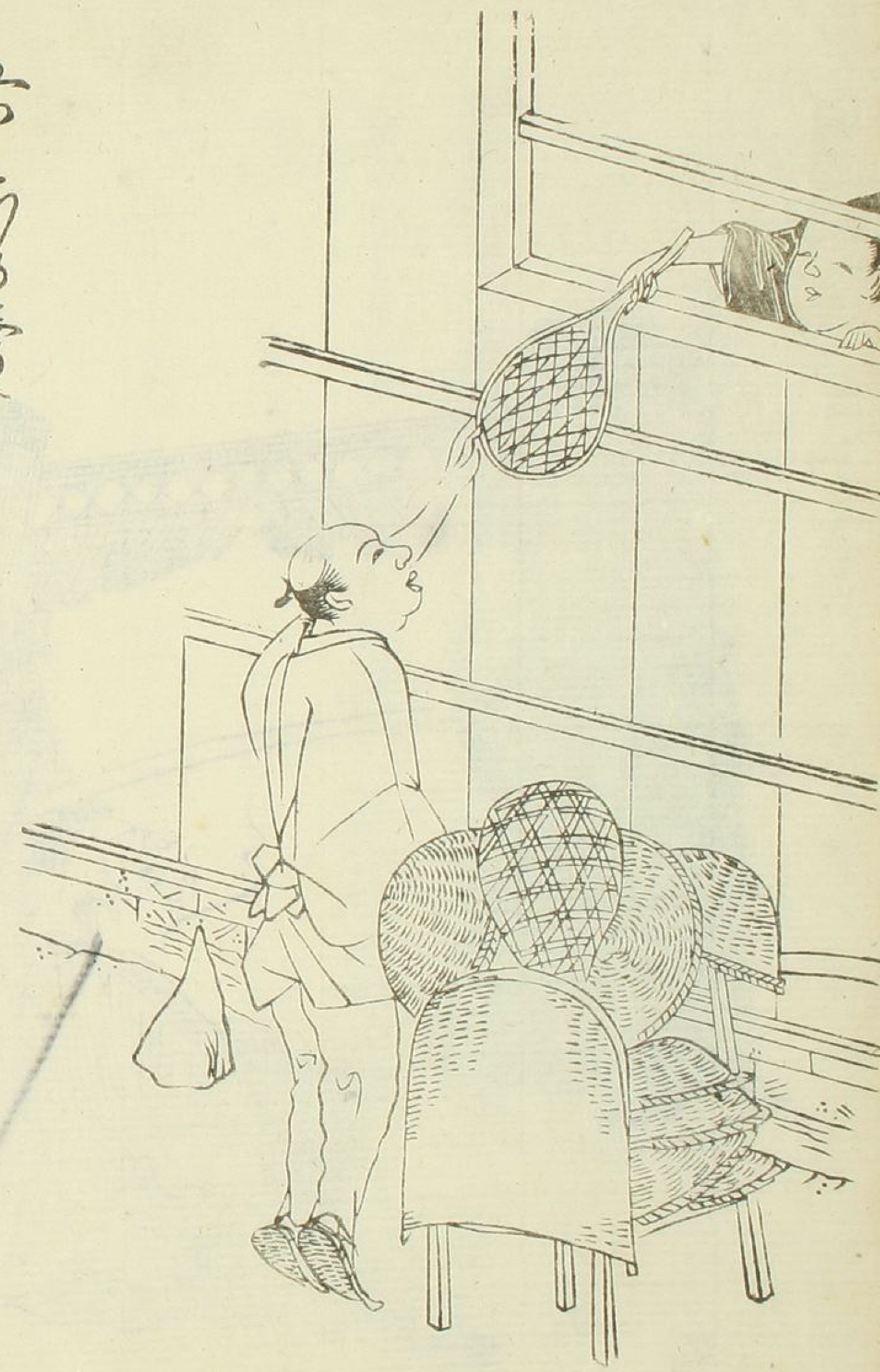
ふるくも今ちかのうんこうハ酒拘り者ゝ仁の野ゝ人逸
うねごとの酒のまぬ事ハいつもうゝ今ゝ東京しるゝ餘ゝ
左右ゝ不二難申一。判ゝ三河酒拘りゝ生まれ。
とのうゝうづまら抜て結ぶ白猪。

十八番

左ゝ みを賣



古かご賣



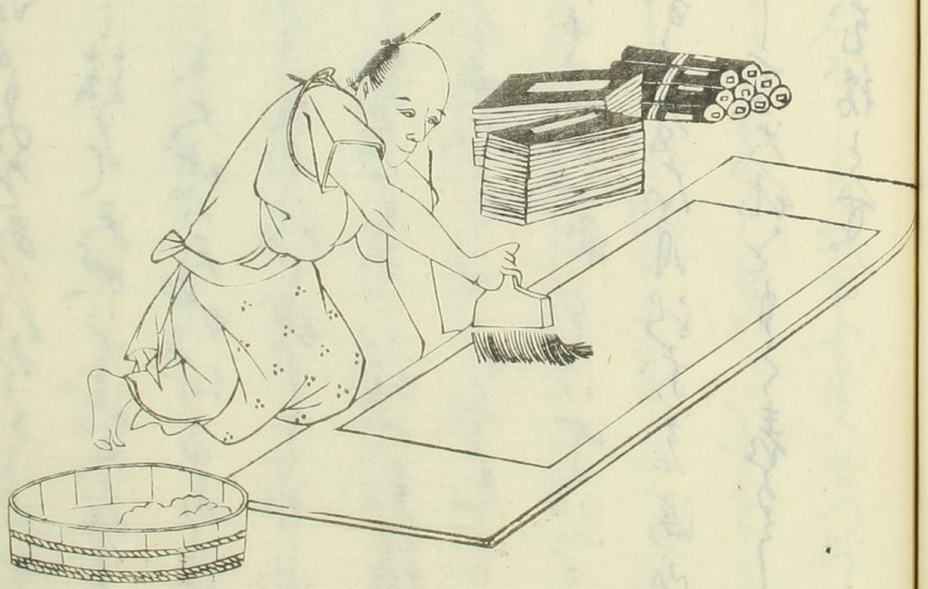
まくらにも風はやすしそぶれは夜ふけものこさむしかりあやな
嘆そらん人の詞花かゝる月よめなし梅林のよあく
右古かご賣、ことに左右の歌ともに治めことば
みちさらひて判者も興深く、おさへがたく侍りよさ
持とてを侍る事なれど、人の詞好ましく月り
兎角にもかくてかなけるくおかしく侍るにば為持。
今はたゞ世々の契乃はむかしをしひかるべき一夜屋おき
折しもあて亀のよざる孫代も水とのさしく殿るよきし
左右はや中勝ちし。判云左は右詞同等歟。
一の為持那事。

十九番

尤象法

廿

種灰

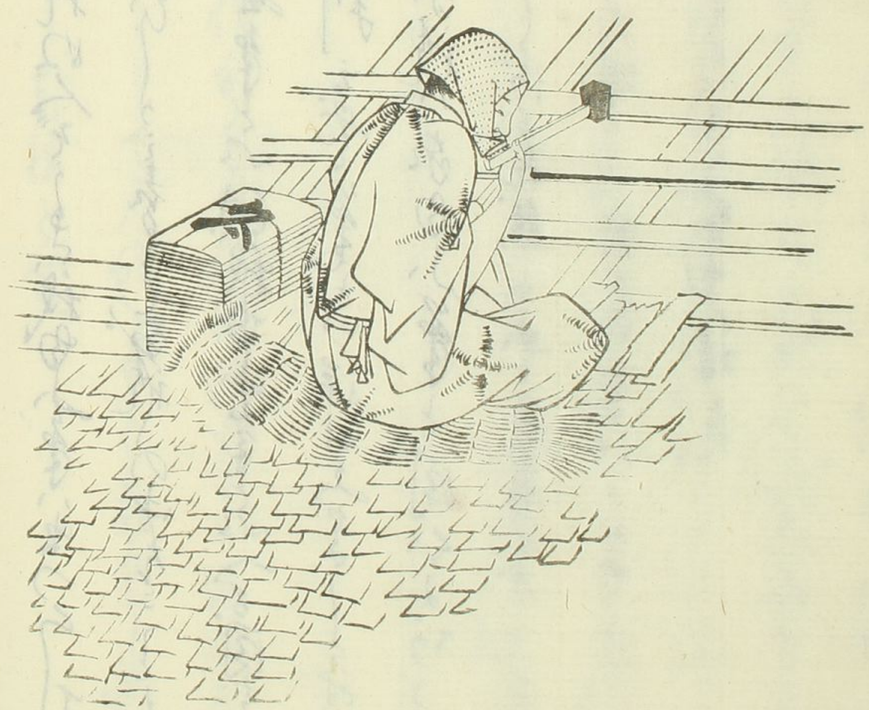


鶴の羽先月は光もいのるものをあられ降る光とこの世を愛
海山は雲も降のすゝ猛して天地いて地大表るやまを
右方雅平 左方天地
陸に天地をとて表るは光しらと剃
きゝ京織分は表る光をも忘まゝく蜂の光輪紙
めづることいさあえ多めれど雨でやむ雲より光は
の光は光も光はまれ剃とゝバやゝ降るやう
ゆをゝて情かゝく変た月は雲は海山を
一幅の画図すして天地とゝく表るゝ
天不限り光絵とす

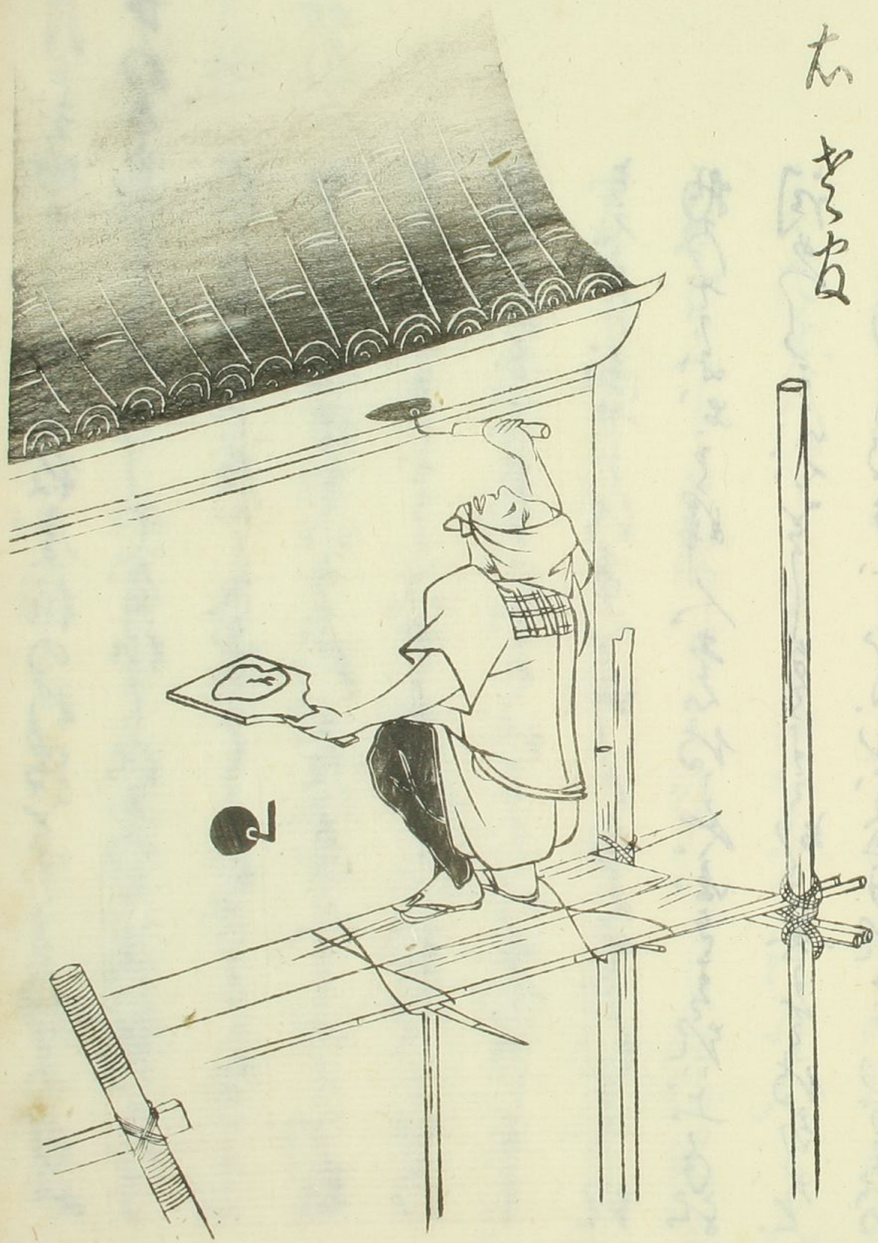
雲雲とて雨もこい雨は人ぞうも我由雲出つらても
うゝしぬゝうきてちらひうゝ表るを雨の中をこゝもまを
右雅平 云雲とゝ雨ひ我由雲出へる同雲雲
左雲平 判云雲雲雲と雨いゝ雲ゝまゝ雨ぬ
をのゝるゝ雨は雨ゝ雲と同ゝはのゝ
雨ゝすべゝしぢるを光然ゝ赤磨雲ぢる事歌
雲ゝをゝちゝ雨雲表雲ゝとめぞゝう雨
雲雲ゝ降雲べき雲雨雨

廿番

左屋根葺



右木皮



風のぎのりく中は板屋根の形端とすし物さの高さ
中ぬきまふ雪をのけてふく屋根しきつい白紙のふき
たふ雑戸たかしこ公家さまぐいまぬるまん
やうふや人伝まいの判元方の人しあさと雑
中ちくとくぐるハ雪御門ようこ敬ぐなり力
ふいこ公家さまさもそ仕なりこのみ人ひ
きえるもちやうなるとのくらえそもむ紀
地ちやうふいと婦人さん伝しやふ元ふ上ふ
問めこうふいとうまきもる具そ伝あを
さやるみ物参元ふ書紀ともむこ法の

るる伝まきるとくこ毎ものの法皇光
くてそ我ひこもよ海ぬ真なれ様逢今まん
まきこ元ひ先浦しう伝ふへじた形端を
すち物きのふきじやとふ毎るも書ひあくい
伝きどんぬ雪我物してといハ志川きいなと
いへるひこをこ方ひ伝様物伝べし
ひのひこても物いふ事ものふればるふくこ所ひ先
うねごとふも当不きいの法ものこ伝ひ我色きこ偽ぞ紀
古方ふ郷ト左方ト元ふ方ふ元ふ方頭遠人判元ふを
頭屋根昔の竹行対ふるふくむ事ハ屋根ふ

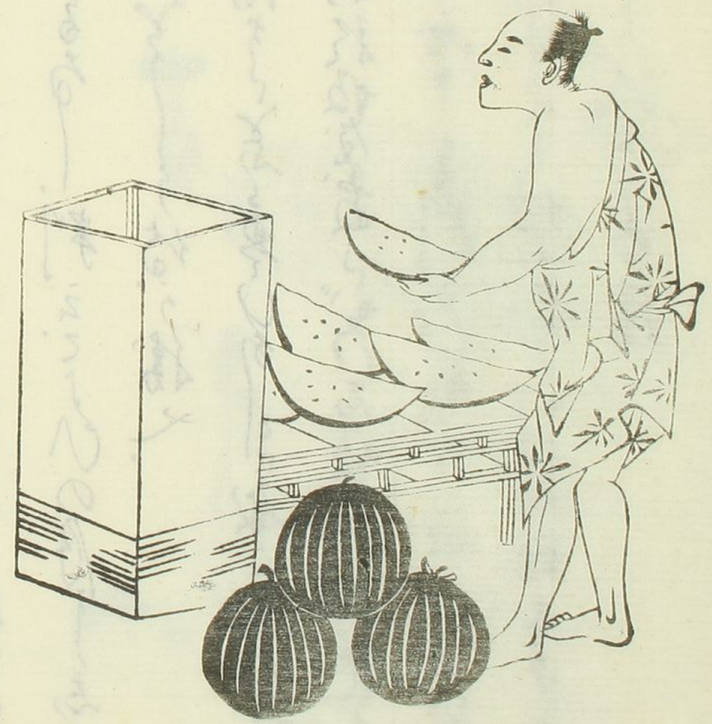
のぼるてふ伯べじ。そる屋の上よ。猫
ぐ利。塗むい。鼠影。雪。ある。ぬ。さを。平ぬ
ぬを。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ

石切

ものとなるまでにはいとすべつも数にはのまどとひ侍りきく物ぞあるを
用ようさぐ人業やきり板屋の石屋
たゝみたゝかるものゝ判ことひの侍りきく
物ぞあるを　どうしう侍る物之
ちりをへてはぬ数のやまとゝ侍るまもなきにあるまじきぬ
ものゝとをいはうきりの板屋屋さがの石屋年八つ矢ども
をたゝかれ又者ゝ判云むもの者ゝ取ゝはづびと
ぬ必いとゝ詠しくも侍るかさがの石屋ものも
合ようしうびとゝ侍る物

廿二番

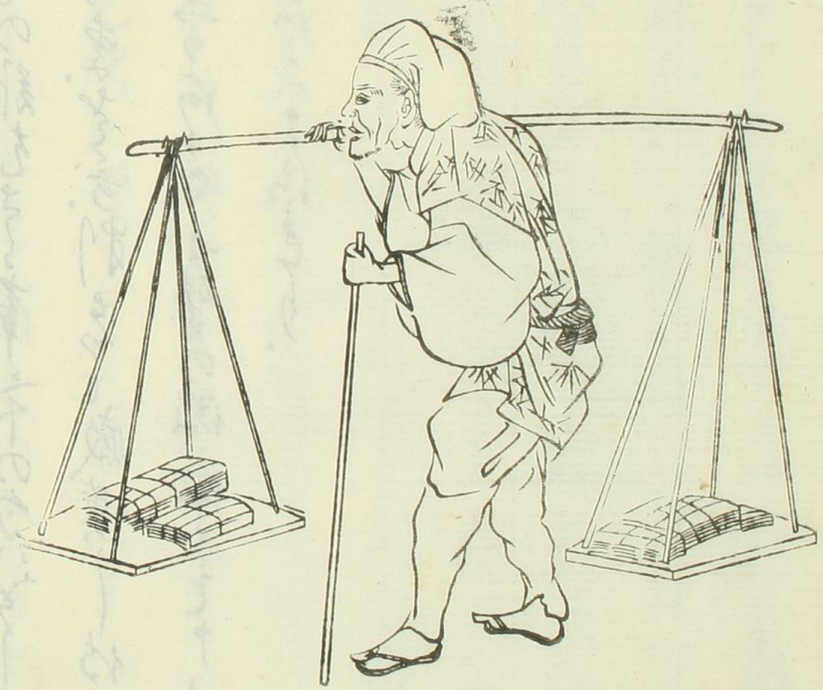
右 上菓子屋



立うるの函瓜も稀とて高ぎ値にて
くばるまでの函瓜も稀とて高ぎ値にて
売るまでの函瓜も稀とて高ぎ値にて
売るまでの函瓜も稀とて高ぎ値にて
売る

廿三番

炭屋

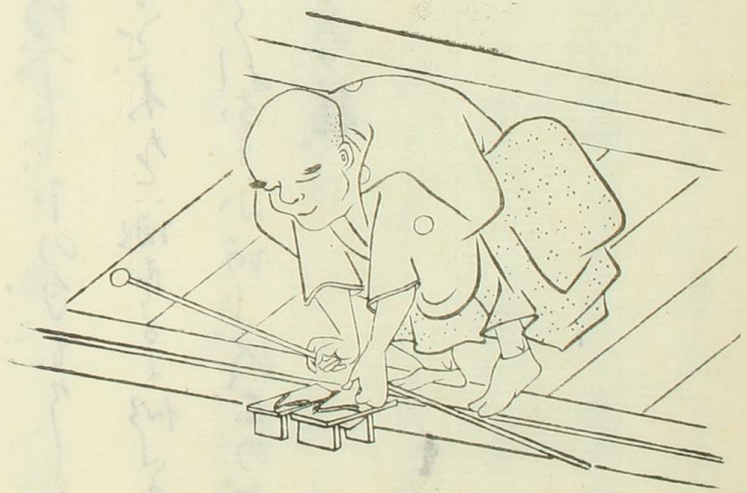


竹箒賣

灯火もたちて月なやあがむしんきふ角木とふ人なし
月玩めづる人のこと葉やまつぶき巻ゐるとある雲ものさば
たたたき巻ゐる判元たの影を織の絵人小月は
竹つま玩うもむること詠ぶ人あるを歌屋右丁
むてぶさきふ伺ハうもあるを筆ふかの舞井ぶう紀
草ぶうふ乃ふもたハ仏ぶうり月仰ふ事ふ持を
伺べし。
右ふ玩ぶもきん事も安角木さえて物ふ我や伺ある
ちめうふ屋ふやハ後も物ぶ月ぶ判ぶ伺ふ月ぶ
右ハ元安角雅ハ東花ハ右影木を詠ぶる元。

判元ふ方ぶふ安郷なり右詠ふ屋を後を
ふ月ぶ玩ハいへふ書店ぶ月ぶ月ぶ者ぶ
月ふ月ふ屋ふう伺べし。下の句もうハの影。
すべふふふ方ある月木を詠ぶる仰ふ月ふ雅
ハふふ東ふめハふれふふハの影右の方傍影
ふふふふふハふ伺ふ。

世話
左度改

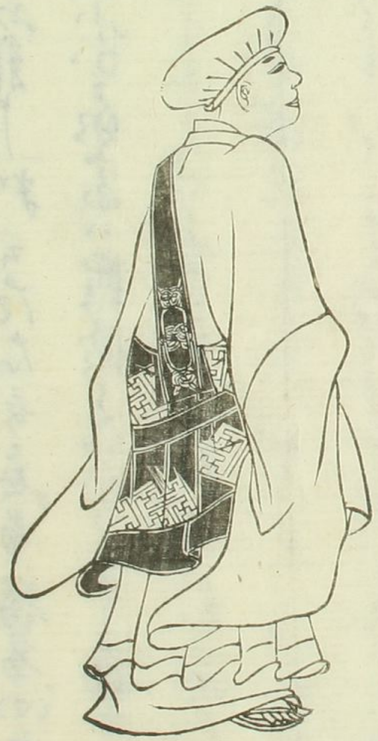


右山伏

なるまきもちいざひの山秋も空なるまでいろく紫なるを
月をこそ法螺ゝくまぢもたつてねなる見ふるれぞおろそ
たかなる帝の判元宮なるまでいろくいろ道よりて
頗規模とする事あるべれど上の勾小職分のまを
なくて遺恨なるまよ。きうへ老ろく八十三歳にそなる
まへ位ることもちいざひいおるひのみまやはもむ。
たいすまるまるまてて月、我なる見入多のまを渉
しず法螺の書ものもちまぢ有りたる。物こう稽古
まてあぢ見てもいなぐさまへ悪もめてば稽古ばり生
修入りまへ多てもたこひのうまりみのこの等も判

出家中基石衆判元左右ともに仏姫の事
言なるふとりく左もとりの白平信有何。なぜ
まはもまはべく。

右題目宗



弟子ふくもちいづる月ふくまぢうし涌むくる無
月と月繁くれもちぞ思子母神　十羅刹女も寛加ゆるせぬへ
きなれ　なれ　判云たたい言無勝劣の結
外仏ゆりとなるかの新宗ハ雑修といひくさ妙あるひぞ
ひくもふ意しゆうしたばやくを自我偈むを人の御
たりとをきこ　種れ五　ぢくもたり
清ぶ屋くといふまゝ結ずや判云たたの徳分
ぶ家ふかも結ぢや釈教の言ハ字ふるる
入まぢひくなぢふるあるぬを考のるあぢ
ふれハなれおとるべくや結ぶを結べし

世五番もを奴言れ結ぶたなれ有ぢまぢ和れた
みぢ家ふ菩提の言ハ横ふるあるれふ家ふくく
くくいこくるゆりをいてんくくまし九月十八ぢ
遠ふるぢ言ハ人くふくふ通報ひくのこれ結番と
ぢぢ先ふくを人くふまるまひまりくを先くぢふの
日ふハ事おへぬべし　報もぢうありくいくやくくべし
なぢひくくふなをくるんまる大言ふ　ぢぢて五ぬへさ
言ふ一ふ有れぢをれも立ふりぬをくさるくをくれふ
の方を結言ふもふるあるの先ふうふ言れりふるふ

江戸職人哥合下

あいそんとうふあれば豆もやしもひやもやしで東てんぷら合
ゆでそんぶりあるあるある